



園のくらしを育む 6

園の風景 (2) — 子どものための時間のつくり方 —

秋田喜代美

1 絵本世界に見るカイロスの時間

私は、絵本と子どもや保育者、保護者のかかわりに関心をもっています。どの子どもも、おもしろい作品を見せてもらっている時の顔は真剣そのものです。先程まで、ダラッとしていた子が別人のような顔を見せたり、何か落ち着かない状態だった子どもたちも、スーッと吸い込まれるように引き寄せられていつたりします。みんなの円に入らず、ゆっくり速度をしていくなあと思っていた子も、いつの間にか読み声の輪に加わっていきます。数年前、絵本作家の村中季絵さんと対談をさせていただいた時に、絵本の内容によって、また一人ひとりの子どもによって、絵本を見たり聴いたりしている時の顔もこんなに違うのだとか、具体的に写真で見せてもらったことがあります。その子どもたちの表情の美しさに、私もまた吸い込まれそうでした。その顔は、遊びでいろいろなことを思いつき、心がワクワクしている時に見せる顔つきとも似ていました。心や頭が動いて、その世界に一体となっ

て身を任せて生きている時間です。そしてそれらが伝染するように、その場の雰囲気をつくり出していくのです。以来、私は絵本の場面を参観させていただく時は、絵本ではなく、絵本を見る子どもたちの顔とまなざしに魅せられています。

乳児期の絵本を味わう姿を見るとしてもよくわかるのですが、その姿は絵本に集中して絵本を対象として見ているのではなく、身体でその世界、場に没入して生きているのです。だから、「もー もーもー」と保育者が読めば、子どもたちの身体は共振し自然に動き出し、また、赤い車を見たときに保育室の同じ物を取つてきて動かし始めたりするのです。

保育や教育における時間を考へる時に、「クロノス」と「カイロス」という二種類の時間を考えていくことが大切です(Erickson, 1996)。クロノスとは、時計が刻む客観的な実時間をいいます。「一日4時間のコアタイムを設ける」とか、「5時間の保育時間」とは、クロノスの時間のことです。それに対してカイロスとは、主観的、体感的に感じる質的に充実した時間のことです。時が経つのを忘れてしまう、実時間とは異なる時間を生きることができます。絵本の時間はまさにこの意味でカイロスの時間を保障するということができるでしょう。「遊び込む」という言葉で表現できる時間はカイロスの時間です。

2 子どもの時間のモジュール化

しかし、子どもたちの生活は本当にカイロスの時間を保障されてきているでしょうか。テレビ番組の「セサミストリート」や「ひらけ！ ポンキッキ」が短時間モジュール（単位）

で構成され、それが後の幼児向け番組などでも続いているのは皆さんもご承知でしょう。

絵本には、多くの園が購入している月刊の総合絵本や通信教育などの雑誌絵本があります。私も保育用の月刊雑誌作りにかかわっているのですが、作家が一冊を通して作る絵本と学習絵本とには、本質的にその時間のつくり方に相違があります。私はそれを、子どもがその本の中の世界でどれだけ生きる時間を感じ取るかの相違ではないかと考えています。学習絵本にはモジュール化された誌面の中に科学もあればお話もあり、さまざまな内容が一冊に盛り込まれています。それによってさまざまな知的な窓を開き、保育とつなぐことができきます。私がかかわっている学習絵本では、各ページでの滞留時間を長くすること、協働し実生活とつながる構成をすることを保育の場での原理にすることで、保育の場での月刊雑誌固有のよさを引き出すことをしてきました。それは、小学校以上の時間が時間割によって形成され、さまざまな経験をバランスをとつてするのと似ていて、生活世界と内容をつなぐ役割をしています。これに対して、いわゆる絵本は、まるごと一冊のお話の世界に子どもが読み手と共に入り込み、それを生きるのです。優れた作品絵本は、絵本の中での時間が割られることなく、子どもは実時間とは別にお話の世界を生きています。私がこのごろ危惧しているのは、集中力が続かない子どもが少なくないとして、子どもを取り巻くメディアがクロノス時間でモジュール化していること、絵本もテレビもそして時には保育者のあり方も刻まれて、短時間集中が大切だと議論されることです。園の生活はそれでよいのでしょうか。また一方で、長時間になれば、そこに子どもが生きられる時間の保

障は生活リズムの上から難しくなります。時間のつくられ方は、子どもの生活の質を方向付けていくのです。

「集中」と「没頭」や「遊び込む」とは似ている言葉ですが、そこで混同したり区別なく使う研究者や実践者に対して、私は抵抗感を覚えます。それは、子ども自身の体験の質としては異なっていると思うからです。幼稚園の教育を、学びやそのための集中力を育てる場として語ることへの私の違和感——それは「集中」ではなく、「夢中」や「没頭」という遊びの世界であり、何かを対象化するのではなく、身体ごとあたかもそのものと共にあらる世界に融合する経験こそが、乳幼児期に必要だと考えているからです。集中力育成のみでは、授業には適応できても、教材となる世界を深く納得でき、楽しめる子どもは育たないと私が思うのはこのあたりでしよう。

子どもにとってのカイロスの時間を経験できる保育者こそ、見通しとゆとりをもち、子ども自身が自分で時間をコントロールする生活者となつていくことを育てていけるのではないかでしょうか。そのためには、保育の場におかれるメディアとしての教材や素材、環境のあり方もまた、息長く使える質と複雑性を子どもたちにもたらすものであるべきだと思います。

(東京大学大学院教授)

参考文献

- Ericksen, F. 1996 Going for the zone: The social and cognitive ecology of teacher-student interaction in classroom conversation. In D. Hicks(Ed.) Discourse, Learning and schooling. New York: Cambridge University Press, pp29-62.